

「神の福音宣言」

主任司祭 晴佐久昌英

復活とは、神の福音宣言の、この世における実現である。

「神の福音宣言」という、少し聞きなれない用語を使ったのには、わけがある。多くの現場であいまいにされている信仰の核心を、明確かつ簡潔に表現するための、ぼくなり工夫である。それこそがイエスのすべてであり、教会の存在理由であるにもかかわらず、それが優先順位のトップとして扱われないために様々な混乱と停滞をもたらしていることを理解してもらうために、あえてこの「福音宣言」ということばを使いたい。

「光あれ」という、創世記における宣言を持ち出すまでもなく、この世界のすべては、神の宣言で成り立っている。この場合、単なる情報伝達の「言葉」ではなく「宣言」というところが重要で、それは、権威のもとにあり、撤回不能で、すべてに及びすべてに関わるものであるということであらわす。

その意味で言うならば、イエス・キリストという「神のことば」は、その存在自体が究極の宣言であり、その口からあふれる言葉は、まさしく神の福音宣言であったはずだ。イエスが「神の国は来た」と宣言するとき、それは絶対者の権威によるものであり、撤回することができず、すべての人にとっての現実となったのである。

イエスの死と復活は、その福音宣言のこの世における実現である。イエスの死後、絶望の闇に閉ざされていた弟子たちは、突然、イエスと出会う。それがどのような出会いだったかは、四福音書のそれぞれの特色ある復活記事を見れば明らかである。この世の現実よりもいっそう圧倒的な現実として、生前よりも真実なるキリストとの出会い。彼らが後に「復活」としか表現し得なかったその体験がすべての出発点である。そのとき弟子たちは、イエスが生前宣言していたことがいま実現したということを確認して理解した。だから彼らは自らもまた宣言そのものとなって、全世界に出発したのである。

すべては、イエス・キリストの「復活」から始まった。復活のキリストと出会ったものは、福音宣言以上の喜びをもはや見出せない。